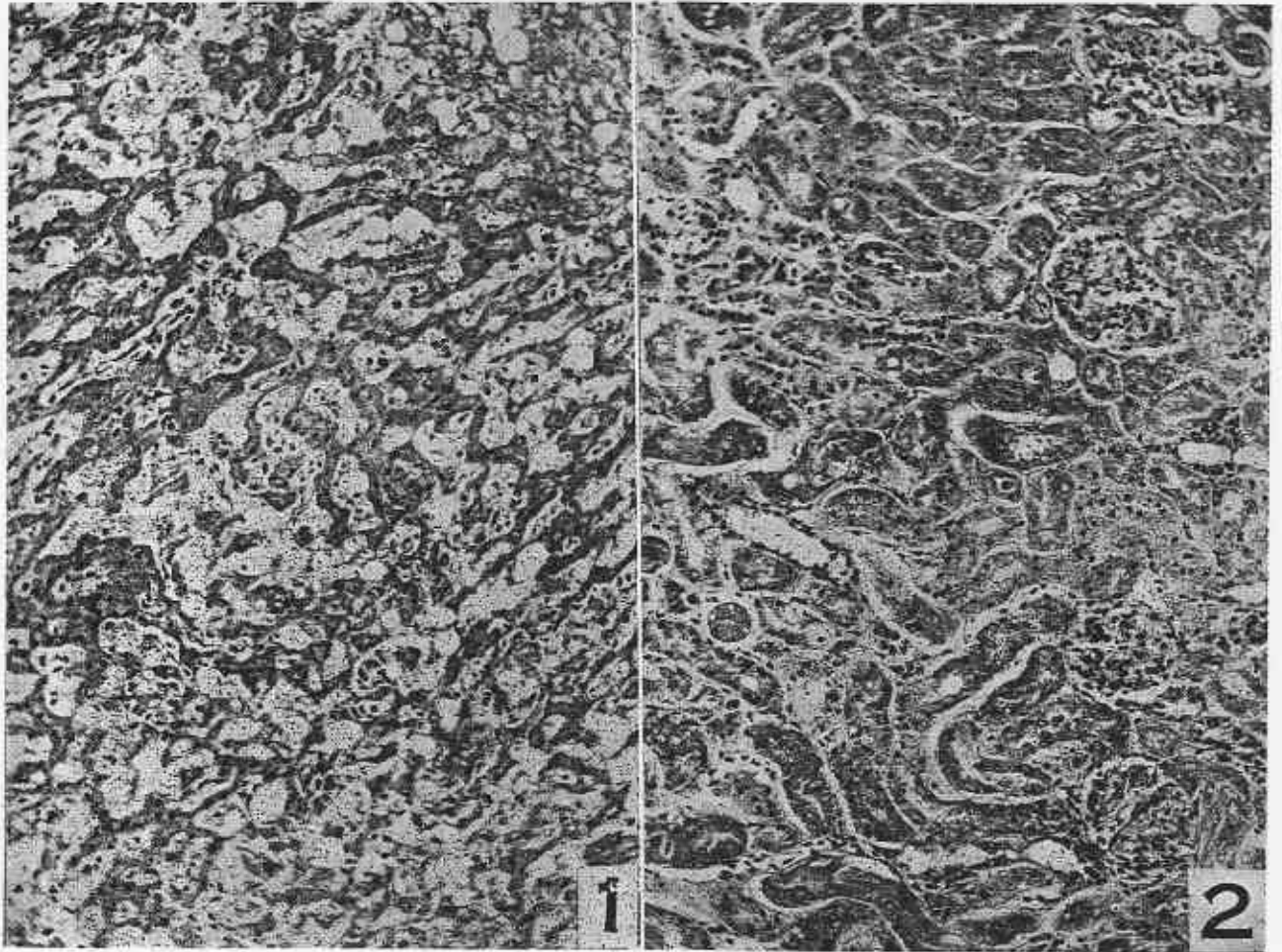


# 日 生 研 究

第 9 卷 昭和 38 年 5 月 第 5 号



## ミンクの黄色色素沈着症

岩手大学農学部獣医学科出題・第2回獣医病理学研修会標本 No. 15. A, B

青森県八戸市にて飼育中のミンク母獣群に分娩後約1カ月頃から元気消失、軟便を排し末期にはタール状便となりへい死するものが続出した。1961年6月頃の被害例である。剖検上、肝は全般にわたり褪色し黄灰色を帯び、硬度軟、諸所に粟粒大ないし米粒大の灰白色斑を散発し、腎も褪色、灰白黄色を呈し断面も同様所見であった。その他肺の限局性暗赤色巣、胃幽門部に小潰瘍形成、腸管粘膜の充出血および体脂肪織の黄変などが注目された。図示のものは肝および腎のヘマトキシリン・エオジン染色標本である。図1(肝)においては高度の脂肪化と多発性壊死巣の存在が注目され(右上端および下端部)、この部の肝細胞は核崩壊あるいは核融解を示す。なお、いたるところの肝細胞内に灰黄または黄褐色色素のビマン性または顆粒状沈着が見られる。肝細胞索は萎縮し一部に半ば崩壊に陥るものあり、類洞は一般に拡張し内皮の増数もあり、壊死巣部には浮腫を示す。図2(腎)においては細尿管上皮の退行像とともに灰黄な

いし黄褐色色素顆粒の沈着が認められ特に皮質部においてこれが顕著に現われている。結局、この両図において肝の脂肪化ないし肝栄養障害症およびネフローゼが診断されるが両者の実質細胞における黄色色素の性状について検索したところではズダンⅢ陽性、チール氏石炭酸フクシン法陰性(ただし、他の2例にては陽性を示した)で鉄および胆汁色素反応はともに陰性を示し、一応脂肪性色素とみなされた。本例においては以上の病変の他体脂肪織に耐酸性色素物質の沈着も見られ、その症状および剖検所見を総合すれば北米やカナダにおいて夙に注目されているミンクの栄養障害症特に黄脂症あるいは脂肪織炎と称されているものと類同のものと認められた。従つて病因学的には分娩や授乳などの附加条件を考慮の上で飼養失宜特に不飽和脂肪体を多含する魚肉類の摂取あるいはいわゆる魚油中毒が第一義的な役割を演じているのだろうと考えられた。